

能楽研究 14巻 : 奥付

雑誌名	能楽研究 : 能楽研究所紀要
巻	14
ページ	238-238
発行年	1989-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020411

〔編集後記〕

昭和63年7月中旬から10月末まで、法政大学の在外研究員として短期間ながら日本を離れ、主としてオランダに滞在しながらイギリスのダラムで開催されたヨーロッパ日本研究協会の大会で研究発表をしたりして、欧米の日本学研究者と交流する機会を得た。研究発表や講演後の質疑などを通して受けた印象では、ごく少数の専門の研究者を除けば、能楽についての理解度は意外に低く、研究に関しては戦前の水準をさほど越えないレベルでの理解が一般的であるらしい。能楽に関心ある欧米人の読む解説書に最新の研究成果を盛り込んだものがほとんどないことが、大きな原因のようである。翻訳しようとしても適当な解説書がないとの嘆きも聞いた。啓蒙的な仕事にも少しは関心を寄せる必要があるようだと感じて帰国したものの、この紀要に載せる論考に没頭するとともに、その気持はどこかに消えてしまった。学術的な仕事は格段と楽しいのである。若い人たちも同様らしいから、能楽のいい解説書がほしいとの欧米の研究者の希望は、当分かなえられないであろう。

歴訪した各国の大学のうち、ライデン大学の日本学科の図書室とロンドン大学アジア・アフリカ研究所には『能楽研究』が揃っていた。ヨーロッパではその二ヶ所だけらしい。日本研究の専門学科のある大学でも、『能楽研究』の知名度は高くないようである。外国の研究機関への寄贈を考慮していなかったの

であるから、当然であろう。この点も徐々に改善しなければならぬまい。

さて、今号は、私の短期留学に加えて能楽研究所が鴻山文庫目録の作成に追われていることもあって、またまた年度末ギリギリの刊行になってしまい、またまた研究展望を次号に回す結果になってしまった。鴻山文庫目録を刊行する明年度はもっと多忙であろうが、うまく調整して、もっとゆとりのある発行を心がけたい。個人が責任を持つ形では負担の大き過ぎる研究展望は、少しスタイルを変更することになるかも知れない。能楽関係の書物や論考の数が増える一方で、分担しての展望にせざるを得ないようなのである

〔表章〕

平成元年三月三十日 発行

能 楽 研 究 第十四号

102 東京都千代田区富士見二一七一一

〇三一二六四一九八一五

編集兼 野上 法政大学能楽研究所
発行者 記念

所長 表 章

印刷所 三和印刷株式会社
長野市川中島町一八三二一一